

# 普賢 Fugen

徒然寺報



発行所：天台宗高龍山明王院普賢寺  
発行人：普賢寺 広報部  
〒183-0004 東京都府中市紅葉丘2-26-4  
電話 042-369-2278 / FAX : 042-336-2610  
URL : http://www.fugenji.com  
メール : info@fugenji.com



## 「差別」と「区別」

毎年、この季節になると春と夏の狭間にいる不思議な気分になります。少し前までは鶯の鳴き声に春の到来を喜んでいましたが、梅雨が明ければ、蝉の大合唱が聞こえて参ります。虫たちもおとなしく雨のしとしと降るこの「間」の時期こそ、季節や命を一層感じる事ができるのかもかもしれません。

さて、本号では「区別」と「差別」について綴ってまいります。今、この相違がなされないがために、誠に遺憾な事件や問題が発生していると感じます。例えば、アメフトのタックル問題や、児童虐待問題、セクハラ、パワハラ問題。これらの問題の多くは、潜在的な差別意識が原因にあるのではないかと、と仏教的な視点から考えられます。

実は、この「差別」という言葉は元来、仏教用語でもありませんが、今の社会的な意味とは異なる意味を持っておりまして。差別を「しやべつ」と読みまして、今の「区別」に近い意味で使われておりました。そして、その違いを乗り越えた世界こそが悟りの世界であると、お経に書かれてあります。言い換えれば、私達人間は、必ず相違を感じてしまうものである、ということを表しているのです。しかし、現在社会的に使われている「差別」は、その違いを認めることができないう幼稚な状態を示しております。

ですので、整理をすると、「違いを乗り越えた悟りの世界」、「違いを認めあった上で行動できる世界」、「違いによって優劣をつける世界」の3つの世界に分類できると考えられます。

順に3つの世界と昨今の問題を参照して、書いてまいりましょう。

昨今、よく話題になるセクハラやパワハラの原因としては、その相違に優劣をつけ、価値観を押し付ける、その精神性にあると考えられます。

日本は儒教思想が相まって、上は下の能力や才能、人格を認めたと上で対応しなければ、パワハラと化す可能性がありません。また、男女でも生殖能力や、腕力の差を振りかざして言動すれば、セクハラとなってしまうのです。ここで、難しいことは、今までの社会は、それを黙認したり、当たり前だと思っていた節が少なからずあるということです。つまり、本人たちは悪気も自覚もなく差別をしてしまっているのです。日本仏教界も昨今はそれが露呈されています。では、私達は、どうすればよいのでしょうか。それは、「自分を大切にしよう」と、

「この精神こそが、差別から区別へ一歩前進することなので、ないでしようか。同じ人間は一人としていけません。ふと気を許すと、その違いに優劣をつけ、自分を大切にしたりがります。その気持ちこそ区別して、認めあいながら接しよう」と踏み出す勇気が昨今は特に試されているようです。



## 健康に生きるには！

6月6日放送の「ためしてガッテン」という番組をたまたま見ておりましたら、面白い内容を放送しておりました。寝たきりや脳卒中中、心臓病になるリスクを下げる事ができる行動が2つあるということです。

それは、「一人に親切にすること」と「つながりをもつこと」だそうです。

これを見た時に、正に仏道の生き方ではないかと、とピンと来ました。と言いますのもこの2つを仏教用語で表すならば「慈悲」と「縁起」です。番組では、生物学的には、人類は協調して生存していたため、周りの人に親切にするということとは、遺伝子が各器官の炎症を抑える働きをして、未病になり、寝たきり予防にもなるということです。また、つながりをもつということが特に高齢になった時の寝たきりリスクを低減させるようです。インターネットという画面上ではなく、実際のつながりこそが、大事なようです。



孤独は心臓病や脳卒中中の発生率を3倍にしているとのデータも紹介されておりました。人はどうやったら1人で生きていくことは出来ません。地域の方や、仕事仲間や、趣味仲間。必ず、誰かしらとの御縁があって存在しております。その御縁を大切にしておいて、つながりをもって生きていくことは自然の道理であると同時に、健康のためなのです。そういえば、仏教界を見渡すと長寿で健康な僧侶が多いように見受けられます。仏道に則って、人に親切にして、御縁をありがたく生きているというシンプルな生活が良いのかもしれない。

かのお釈迦様も、あの時代において80歳まで生きられ、入寂するまで弟子たちに説法をしておりました。正に、健康に生きる秘訣を身を以てお示しいただいたのかと思われまます。



# 論ももも 餓鬼

## そもそも 施餓鬼とはなにか

今回のそもそも論は「施餓鬼」です。毎年、慣例のようにご案内をお出ししている施餓鬼会ではありますが、実は日本の各家の先祖精霊を供養するお盆とは、異なる背景として発展した行事であります。

施餓鬼とは読んで字の如く、餓鬼に供物を施すことを言います。

昔、お釈迦様の弟子が、餓鬼に会い「お前はあと3日で死んで餓鬼になるぞ」と脅されました。そこで、どうすればそれが免れるかと問うたところ餓鬼は「無数の餓鬼と多くの僧たちに食を施し、自分のために仏法僧の三宝(仏、法、僧)に供養すればその功德によって、餓鬼も救われ、お前も死なずにすむだろう」と言われたそうです。それに従った弟子は3日後、死なずに助かったというお話があります。ですので、施餓鬼会自体は、お盆に1回というのではなく毎日でも行ってよいことなのです。(僧は毎日行っております)

## 意外な！ 仏教用語

### 玄関

お家には必ずある玄関。実は元々は仏教用語でした。字を見てみますと、「玄」とは深い悟りという意味ですので、その関門となる場所。つまり、悟りへの入り口、という意味を持っておりました。

中世では、禅宗の道場の正面の入り口こそが、さとりへの関門という意味で定着しました。その後、武家屋敷がそれに倣い、入り口を玄関と呼ぶことにしたのでした。また、当時の玄関は、今の玄関とは比べものにならないほど大きなもので、武家屋敷の入り口は、同時に社交の場としても発展していきました

家の接待場という意味においても非常に重要な意味をもつようになりました。その為、玄関から出入りできるのは家主か来客のみであって、妻や家族等でも玄関からの出入りは許されませんでした。その風習は今でも残っておりまして、寺の玄関は住職しか出入り出来ない場所となっております。

小僧たちは、裏の勝手口から出入りするのです。現代では、玄関はただの入り口と化しておりますが、家庭こそが修行の場と考え、悟りへの入り口として考えることも必要なのかもしれません。



## Info

### 1. 結婚致しました

小僧の常寛が、去る三月十七日に普賢寺本堂にて、結婚式を挙げさせていただきました。



### 2. 寺庭(僧侶の妻)の挨拶文

この度、常寛さんと結婚致しました恵利子と申します。

先日、お彼岸の際にもご挨拶をさせて頂いたのですが、私がお寺に参らせて頂いたのは、私がお寺の方について詳しくなく、まさか結婚することになりました。縁があり、このように嫁ぐことになりましたので、これから先、普賢寺のことに力添えをお願いします。建設系会社で勤務しながら、毎月28日の普賢寺にお彼岸をお参りして、皆様をお待ちしております。小野恵利子



その施餓鬼をすることによって、皆様は功德を得ることが出来、各家のご先祖様への供養をする事ができ、自分たちも幸せの道にもつながるといふことでお盆の行事とセットになって鎌倉時代以降に定着してまいりました。この行事をただのおとぎ話のように感じて、先祖供養にまつわるお話として終わらせても結構なのですが、実は、この行事は、ご先祖様だけでなく、供養をする側の私たちの心を整えているということでもあります。お経は伝説的な話の側面と極めて現実的な側面があります。ここでは、餓鬼とは、実は自分たちの心そのものを表しております。

私達の心というものは権力、金、承認などなど、欲にまみれている時もあるれば、心にゆとりをもたせていて、大らかな心の時もあります。施餓鬼とはそんな自分たちの心に施しを与える時間でもあります。そして、その心を以て、ご先祖様に感謝する時間でもあるのです。

そして、施餓鬼会ということでもありませんので、ただご先祖のためにお墓参りをするのだけではなく、折角の機会でございますので、御縁のある方や、横にいる方、そして、自身に施す特別な時間を過ごしていただけたなら、と願っております。